

子ども・父母参加の学校づくり

## 共同を積み重ねることの意義

廣田 健

### 一 研究課題と討論の柱

分科会の冒頭では、左記のような研究課題を確認し、これを元に、討議・検討が行われた。

- ①子どもと学校、家族・家庭、地域の現状と教育政策との反映をしつかりとつかむこと。
- ②子ども、保護者と教職員、そして地域による学校づくりの実践交流をすること。
- ③教職員集団の実態を踏まえ、同僚性を高め、教育的力量をどのように高めあい、授業づくりや自治活動を中心としながら、教育活動と民主的 school づくりを協同的・創造的にすすめていくために何が必要かを明らかにすること。
- ④学校づくりにおけるPTA、教職員組合、行政の役割をどうとらえ、その役割を發揮していくために何が必

要かを明らかにすること。

- ⑤「日の丸・君が代通知」「服務規律調査」「情報提供制度」などの教職員と学校を上から縛る政策、さらには「教職員評価制度」「査定制度」や「教育三法」の具体化など、学校制度そのものが変えられようとする中、これからの学校づくりの課題を明らかにすること。

### 二 各レポートの紹介

今年度寄せられた6レポートのうち、公開とされた4本の概要は次の通りである。

#### (1) 『東日本大震災プロジェクト』について

―折鶴に祈りをこめて―

佐藤 雅一 氏（宗谷教組・礼文町立船泊中学校）

同校では、東日本大震災以降に「それぞれの先生がそれぞれの教科で、それぞれの言葉で大地震を語りはじめた」ことをきっかけに、生徒達から「私達にできることはないだろうか」との声があがった。その中で折鶴2万1千羽とメッセージを、被災した学校に届けることで、同校の被災者への思いを届けるプロジェクトが発案されたのである。プロジェクトを、只のイベントとして終わらないため、「被

災害・被災地のことを忘れない」「船中全員の絆を深めること」を目的として、学校だけでなく地域の人々にも参加を呼びかけ進められた。そのために生徒は、校外班に分かれて、約500戸にもなるぼる校区内すべての家を個別訪問、その意義を伝えて行ったことが報告された。結果として、目標の2万1千羽を越える折鶴が集まり、教頭先生がこれを夏休みに現地に届けることができた。

議論の中では、まず何よりも生徒の自主性を大切にしながらの取組であったこと、その自主性を支える学校と地域の共同があったこと、生徒達はこの取組みをやりきること、地域に対する信頼と、お互いを認め合い、自分達を誇りに思う気持ちが生まれたこと、それが次の行動の原動力になっていることが明らかにされた。また、この地域との厚い連携の背景には、かつての困難な時期に始まった校外班活動による、日常からの結びつきを基盤とする地道な取組があることも注目された。

## (2) いま時<sup>2</sup>の定時制高校生の挑戦・保護者の挑戦

2011

### 岡崎 恵治 氏（定時制高校PTA会長）

保護者による生徒と学校を繋ぐ可能性を論じたレポートである。いま時<sup>2</sup>の定時制高校は、必ずしも「働きのなが

ら通う」という形ではなく、何らかの困難な事情を抱えて通う生徒が多い。それゆえ、報告者は、定時制高校を模索と中学時代にやれなかったことの「取り戻し」の場として機能していると評価する。

困難は高校に進学しただけでは自然に解消される訳ではなく、生徒達は高校でもなかなかやりがいを見つけないで、生徒達は高校でもなかなかやりがいを見つけないで、途中で退学する者が少なくない。また、親たちも自分の子どものそうした様子を見て、何らかの援助をしたいと思うのだが、高校生にもなると自分の子どもでもあるが故に、かえって素直に話し合う機会を持たなくなる。そうした状況の中で、PTA役員は、自分の子どもと同じ困難を抱える子どもの友人を通じて、「子どもが高校生活に本当に望んでいること」を聞きたいと思い、生徒会役員との懇談会を開くのである。この中で「せっかく入学したのだから、みんなで一緒に卒業したい。生徒会の行事を楽しくして、やめる生徒を減らしたい」との切実な意見が出された。

一般に困難を抱えてきた生徒達は、これまで十分に学校生活の中でやりがいを感じたことが少ないし、定時制に来ても同じ校舎を使う全日制に遠慮する気持ちがあつて主人公として扱われていないとの感覚を持つていた。そこで、PTAはこの生徒達の切実な願いを「希望を捨てずに、どうしたら実現できるか、多くの生徒の意見を集めて何年度で

も何年でも先生方と話し合おう」と励ますことで、三者協議会に生徒から新しい挑戦が提案できるような環境整備を行ったのである。最初は少し離れていたところで見えた生徒達も、また生徒のこうした働きかけに疑義をもつていた先生方も、ともに夢を語りながら少しずつ前進する事で想いを実行できたとの事であった。このことは生徒の力をまとめ上げた生徒会役員にとつての“取り戻し”の日々であったと同時に、PTA役員の助言もあつて、彼らの語つた夢と希望が後輩に引き継がれていくきっかけにもなつた。

またこのことは、管理的な教育行政が進行するなかで新しい挑戦に臆病となつている教員達、これまでPTAに参加できなかった親達にとつても、悩みの分かち合いともなり、変わりゆく子どもの姿を見て、自分達も変わることに必要性を感じていく過程ともなつたとの報告があつた。

議論の中では、生徒自身が身近な要求の実現を通じて、仲間との繋がりを深めることで、居場所を作ることの重要性、そしてその要求実現の支援を通じて、お互いが直面する悩みを分かち合いながら保護者同士、保護者と教員が繋がることの大切さが論議された。

### (3) 芸術鑑賞会の取り組みで考えたことー地域の芸術・文化サークルの方をよぶことの意味

渡来 和夫（高教組・遠軽定時制高校）

遠軽高校では文化・芸術鑑賞活動の一環として、毎年、町が行つていた著名人をよんでの鑑賞会に学校を挙げて参加していた。しかしながら、ここ数年、町村合併の議論が盛んになる中で、予算が付けられず実施されていかなかった。

そんな中で、文化・芸術活動に触れる機会が少ない土地柄であるからこそ、生徒達に優れた文化・芸術鑑賞活動をさせるべきだとの意見が、教員の間で強く挙がつていた。それを受けて、はじめは“苦肉の策”として、交通費や謝礼が節約できる地元で演奏活動を行う人々やサークル（たとえば、尺ルート、遠軽がんぼう太鼓、ゴスペル等）に依頼して鑑賞会を実施することになった。大きな舞台ではなく、すぐに観客である生徒と応答できる規模での演奏は、むしろ著名人の講演会よりも、ずっと親しみが湧き「迫力がある」と生徒達にも好評であつた。

この取り組みを行う中で、報告者が気付いたのは、地元のサークルによる演奏は単に「迫力がある」だけではなく、おそらく地元に残ることを志向するだろう生徒達にとつて、これからの生涯にわたる文化・芸術活動への橋渡しと、

それを通じた地域の人々の繋がりに触れるきつかけとなることであった。こうしたサークルで活動する大人たちは、公務員、花屋、小学校教員、介護職員、医師など地域で働きながら、地域の文化活動を支えてきた人たちである。一方、定時制に通う生徒達の経済的困難さを考えると、いわゆる芝居や映画、コンサートに行く機会は少なく、芸術に触れることは極めて少ない状況にあることが想像される。そんな中で、地域で活動する方々に学校に来て演奏活動など行ってもらうことは、子どもたちが社会に出てから、仕事と家庭の往復だけではなく、文化・芸術サークルに参加して地域の文化を支え、友人を作り、生き生きと生活する大人の一つのモデルになると、報告者は評価している。元のサークルの方々には、演奏活動だけでなく、様々な職業を持ちながら、趣味で集まり、地域文化の担い手とついている様子を語ってもらうことを心がけているとの報告があった。

議論の中では、地域に文化的な団体や施設のある意味が論議され、また(2)の報告と絡んで、レクリエーション活動が学校づくりに果たす役割の重要性が議論された。

(4) みんなで創る「ふるさと母校」——子どもたちの成長を支えた保護者・地域・学校の力合わせ

川越 岳人（宗谷教組・稚内西中学校）

報告者の勤務校は、小・中並置校であり、小学校・中学校いずれも生徒数が1桁の小規模へき地校である。児童・生徒は、仲がよく真面目であるが、一方で多様な人たちと接した経験が少ないこともあって、全体としておとなしく社交性に乏しいという小規模校が共通して抱える問題を有していた。こうした少人数で活動することの課題を解決するために、学校外の様々な人々と関わる機会を少しでも増やす取り組みがなされていた。特徴的な課題としては、生徒たちから出された東日本大震災義援募金の呼びかけのための個別訪問、地区との合同で行われた桜花見会・学校祭等である。この取り組みの中で、生徒は視野の広がりや自信、表現力を獲得し、地域は改めて人々の繋がりを確認し、活力を取り返していくきつかけとなっている。

討論では、学校からの地域への発信の重要性や、学校行事の支援が地域にとって重荷になるのではなく、地域自体も一体となって楽しむことの重要性等が出された。

この他にも、非公開レポートではあるが、父母の会の取り組みや、大学生の学習支援と学校づくりの問題などが報

告された。

## 二一 議論

これらのレポートを受けて、総括討論において議論になった内容を筆者なりにまとめると、次の4点が挙げられる。

### (1) 新自由主義政策に対する批判

今回、すべてのレポートに共通して問題となったのは、政府が進める新自由主義政策の影響である。自由な市場競争による効率化と自己責任を原理とする新自由主義は、人々を際限ない競争に駆り立てる。経済効率がすべてに優先され、数値に表すことが難しい安心・絆・居場所・学ぶ喜び等は看過される。競争は互いを認め高めあうものではなく、他者に対する優越的地位の獲得だけが問題となってくる。

経済的効率が低いと判断された子ども・地域・学校は積極的な支援を打ち切られ、競争に勝ち続ける子どもも、また常に落ちこぼれる心配を抱え続けている。本来、子どもを支えるべき家庭や社会にその余裕がなくなり、教師たちも厳しい評価を受けながら、掲げられた達成不能な「目標」

と「現実」との間で苦悩している。

こうした中で、学校づくりにもっとも必要な共同・信頼の絆が断ち切れようとしている。

### (2) 子どもの要求に沿った取り組みの重要性

これに対して、非公開を含め今回提出されたレポートの全てに共通したことが、子どもの要求に徹底的に沿った「学び」を学校・保護者・地域等が支援をすることで、子どもの学ぶ意欲と主体性が育ち、地域の力が回復していったことである。

新自由主義は、効率性の追求を最大の政策動機としているため、求められる「結果」を出すために、時間のかかる「過程」をできる限り省く傾向にある。このため、教育からは、「学び」をより面白くしていく学習者の試行錯誤の過程が失われる。その結果「学び」は学習者の意欲・要求と対峙し、子どもを抑圧・阻害するものとして立ち現れるのである。

これに対して、子どもの要求に沿った取り組みを進めることは、一見、遠回りのようでありながら、活動そのものから意欲・関心を引き出すと共に、試行錯誤を繰り返すことで、探求する喜びや達成感を獲得する事につながる。「学び」そのものを楽しむことで、自分にとつての知識の意味

を問い直すきつかけともなる。また、仲間と共に課題解決に取り組むことで、学びは競争ではなく、人々を繋げるものであり、自らを認めてくれる居場所を創り出すものに変化する。すなわち、学ぶことが、仲間への信頼と自己肯定感の向上につながるのである。

加えて、今回のレポートで特徴的だったことは、「学び」の範囲を、いわゆる「知識の獲得」の過程とだけ狭くとらえるのではなく、文化祭・地域活動・コンサート・野外活動等の文化・レクリエーションまで広げること、自己を自由に表現・解放する可能性を広げ、生徒同士の、あるいは教師・保護者・地域住民との絆を紡ぎきつかけとなったことである。

### (3) 同僚性と学校外の力の重要性

このように「学び」の認識が広がり、学校が子どもへの意欲・関心に合わせた柔軟な活動ができるためには、何よりも教職員が互いに努力や工夫を活かすことのできる環境、すなわち「命令―服従」関係ではない、教職員の同僚性の維持が大切であることは、今回の分科会での議論でも繰り返し述べられた。

しかし、今日の教育の困難は、先に挙げたように新自由

主義政策による地域の疲労（失業等の経済的困難・家庭の崩壊・限界集落化等）にあるならば、学校現場だけでは決することは難しい。実は、徹底した管理の下におかれ仲間との絆が分断されているのは、子どもや教職員だけでなく、地域に暮らす人々もまた本質的には同じ環境におかれているのである。

それゆえに、今回のレポートに共通したのは、子どもを中心とする取り組みの中で、保護者や地域の絆の回復や深まりもまた見いだされたと言うことである。なかなか理解し合うことのできない親子、若者の流出に活力を失う地域、経済的困難からストレスを抱える保護者。こうした人々が、未来の主権者でもある子どもを共に考え、支える中で、支援者自らの居場所や未来への希望を見つけたにしていることである。

また、異質な集団が結びつくことで、これまで自らの集団には見られなかった新鮮な視点や多様な観点が発見され、互いを励ますことで取り組みがよりパワーアップしていることも注目された。特に、管理が強化される中で、新しい取り組みに対し慎重になりがちな学校が、保護者・地域住民の支援を得て新しい挑戦をするきつかけが生まれたことは印象的であった。

(4) オルタナティブを積み重ねることの重要性

最後の特徴は、学校と教育のあるべき姿（オルタナティブ）を構想し、実践を積み重ねることの重要性が確認されたことである。今年の分科会を、ある共同研究者が「これまでになく『しつとり』とした取り組みの見えるもの」と評していた。討論には派手さこそ無いが、回を重ねる毎に、報告される一つひとつの取り組み・レポートの内容が地域・学校にしっかりと根を張る様子が何われ、学校だけでなく地域をも元気づけるものとなっている。それは本分科会が「民主的職場づくり」から始まり、「民主的學校づくり」、そして現在の「子ども、父母参加の學校づくり」へと名称を変更する中で、少しずつ広げ強化されてきた視野と絆によって培われた成果の現れであろう。

（北海道教育大学）